

『神様に見捨てられる人は誰もいない』

ローマの信徒への手紙 3章9節～26節

皆さんは、人にされて嫌だな、見捨てられたなって思ったことはあるでしょうか？例えば、ある人に「ねーねー、こっちにおいで～。良い物あげるから～」と、仲の良い友人は言われましたが、私には何も言わずに何もくれず、知らんぷりされてしまう。他の人と一緒にいるのに優劣、良い悪いを付けられてしまう。優れている方に自分自身がいれば、まだ気持ちは良いですが、劣っている方に自分自身がいれば、それはもう嫌な気持ちになりますよね。人と比べられて他の人の方が自分よりも優れている、または良いなって思うものをもらうなどとすると、本当に寂しいですし、悲しい気持ちになります。

今日の説教題は『神様に見捨てられる人は誰もいない』と付けさせて頂きました。それはどういうことなのか。皆さんと一緒に今日与えられた聖書箇所を通してみてきたいと思えます。

今日の箇所は、パウロがローマの人々に送った手紙の中の言葉です。ここでパウロは、全ての人を罪人であるとしています。旧約聖書の時代に、神の民として選ばれたユダヤ人も、特別な存在ではなく、ギリシア人のような異邦人も、みんな同じ罪人なのですよ、と言っているのです。私たちに置き換えてみますと、クリスチャンであろうが、クリスチャンでなかろうが、神様の前ではみな同じ罪人なのですよ、ってことです。クリスチャンだから特別で、神様は罪人である私たちの罪を赦して下さり、クリスチャンでないから、神様から見捨てられているってことではないのです。私たちは神様を信じ、神様に従いたいと願っているということは、まだ神様を知らない人たち、また神様を知ってはいるが、受け入れていない人たちとは、その点においては違いがありますが、「罪人である」ということに関しては、他の人と変わりはないのです。

ユダヤ人は、神に選ばれた民とされてきました。しかし神様は、このユダヤ人を通して、全世界の人々に福音が伝わるようにして下さったのです。ですから、ユダヤ人が「私たちは神に選ばれている。だから、罪とは関係ないのだ」と、考えていることに対してパウロは、「彼らユダヤ人は他の異邦人と何も違いはない」ということを言っているのです。ここでパウロは、当時の聖書でもある旧約聖書から引用して、傲慢なユダヤ人のことを記しています。「正しい者はいない。一人もいない。」と。

パウロという人物は、旧約聖書の律法を守り抜く人であったため、旧約聖書の御言葉がすべて頭の中に入っていたのです。ですから、色々な旧約聖書の箇所を選び取り見取り繋ぎ合わせて記したのです。パウロは人間の悪の状態を、ものすごく知る人物だったのです。なぜなら彼は以前、教会を荒らし、男女を問わず引きずり出して牢にぶち込むような悪い人物で、キリスト教徒を迫害する立場にいた人間だったからです。パウロは人間の悪を明確に旧約聖書を用いて、示しているのです。それは13節「彼らののは開いた墓のようであり、彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある」とあります。

これは詩編の言葉で、開いた墓には腐った死体が入っていて、その腐敗した臭いが漂うほど、嫌な空気になるということです。そして、同じ口からでも、平和を語ったり、相手に対してお世辞を言うことも出来ますが、その腹の裏では蝮の毒のような、悪口や毒々しいことを思っているかもしれない、ということです。

例えば面と向かっては「まあまあ、仲良くやってみましょうよ。仲間なのですから。」って、言っておきながら、裏では「あいつ本当にうざいし、本当に嫌いだ」と、言っているかもしれないということです。

先日もニュースで、カヌー日本代表の選手が、仲の良い慕ってくれている後輩選手に対して、薬物を投入し、カヌー競技を出来なくさせようとしていた事件がありました。しかし、面と向かっては感じ良く接しているが、裏では後輩を蹴落とそうとしていたのです。そのように腹の裏には毒があると言っているのです。

そして14節～16節「口は、呪いと苦みで満ち、足は血を流すのに速く、その道には破壊と悲慘がある」とあります。これはイザヤ書の言葉で、良いことも悪いことも言えるその口は、人間の体の構造上、足の上についていて、歩き回れて移動することが出来るということです。そして、その道では人々を傷つけることもでき、関係を破壊することもできるのです。

このようなことが、人間の悪で、たとえ神の民だとしても、この悪に犯される可能性は大いにある、ということです。ユダヤ人が「私たちは神に選ばれているから特別なのだ」、「律法を守っているから、私たちは大丈夫、罪人ではないのだ」と、傲慢な態度でいる彼らのことを、パウロは言っています。もしかしたらパウロは、パウロがユダヤ人であるので、悔い改める前の自分自身のことを、思い描いていたのかもしれませんが。

私たちの世の中でも、このような傲慢な人がいるのではないかなと思います。「私はもう完ぺき。私の言うことは全部合ってるし、私の言うことを聞いていけば間違いはない。私は決まり事を守っているし、やる事もやっているから、上から目線で物申すことが出来るのだ」、というような態度の人が、もしかしたらいるかもしれません。しかし、神様は、そのような人も、そうでない人も、みんな同じ罪人であって、特別扱いはしないのです。

旧約聖書で、アダムとエバの物語があります。アダムは神様が造った最初の人間で、その助け手としてエバをお造りになりました。神様と共に歩んでいたその二人が、神様から離れる、神様を裏切る行動をしてしまったために、それ以来、人間には罪が入り込んでしまい、神様と離れてしまう関係になってしまったのです。これが聖書の言う「罪」です。しかし、アダムもエバも、傲慢な人も、そうでない人も、罪人である私たち全員をその罪が赦されるために、神様は、神様の独り子であるイエス・キリストをこの地上に送って下さったのです。そして、鞭打たれ、十字架につけられ、血を流し私たちの罪の身代わりとなって、死に至らせることによって、私たちの罪が赦されるようにして下さったのです。そのことが23、24節に記されてあります。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」そして、三日後に復活され、そのことを信じる者は誰でも、この地上での与えられた生涯を終えた後、天の国での永遠の命が与えられると、聖書は語っているのです。

神様は、私たちと常に共にいたいのです。神様と共にいることができる関係を、イエス・キリストの十字架の死と復活によって、回復させて下さったのです。神様から離れて行くのはいつも私たちの方です。神様は、「あの人の罪は赦してあげよう」、「この人は生意気だから、罪を赦すのはやめておこう」というように、分け隔てすることはされないお方です。どんな人でも、この地上に生きている人は誰でも、「罪は赦される」と聖書は語っているの

です。

10 節にある「正しい者はいない」の「正しい」というのは、神様の目から見て正しいという意味です。神様に従順で、神様を第一に考え従っていることを、ここでは「正しい」としています。パウロはここで、完ぺきに神様に従っている正しい者は一人もいないとしています。なぜなら、私たちには罪があり、神様のように罪が一切なく、完ぺきな人は誰一人としていないからです。神様はどんな人も特別扱いはせず、分け隔てることもなく、私たち一人ひとりのことを思い、私たちが生まれながらにして持っている罪を赦して下さるのです。それが 22 節の「すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。」ということです。たとえ、辛い状況の中にいる人でも、仲間や友達がいなく独りぼっちと感じている人でも、神様だけはあなたを見捨てない。神様だけはあなたを分け隔てることなく差別されない。神様だけはあなたの罪を赦して下さる。それは私たちの目には見えませんが、神様は私たち一人ひとりを、見捨てることなく、いつも共におられるのだと、信じることはできます。

パウロの言う、どんなに悪があるひどい人でも、またどんなに自分は正しいし、罪なんか無いって思っている人でも、神様は、みんな平等に必ず罪を赦して下さるのです。自分なんか神様から見捨てられているのではないか。自分なんか誰も見てくれないのではないか。そう感じている方。またそう感じたことがある方。今日は神様が、私たち一人ひとりのことを、見捨てることなく、分け隔て差別することなく、罪を赦して下さる、ということを感じて、今週も歩んで参りたい、そう願います。